

Factor Analysis of Behavioral Stage of Japanese Nursing Students with Obstacles to International Council of Nurses (ICN) Congress - Necessity of Informing Lower Grade Students

慶應義塾大学大学院 健康マネジメント研究科 医療マネジメント学修士 2 年  
佐村 紫帆, 82228095

【概要】

本活動は、コロナウイルスの感染拡大以前より問題視されてきた、日本の看護学生の国際学会参加の難しさについて障壁要因を明らかにし、解決策を提言するために行った。看護分野で最大の ICN Congress を取り上げ、認知度や参加意欲、学会や学生大会に参加したいと思った際に障壁となる事柄等について調査しました。アンケートは、インターネット調査により実施し、大学の看護系学部に通う全学年 632 名から回答を回収できた。それらを独自に発展させた「行動変容 AIDMA モデル」(行動変容モデル: ①“ICN 大会を知らない”~⑥“ICN大会に参加した”までの 6 段階の行動ステージ) を用いて分類し、8 割以上の看護学生が ICN Congress について認知していないことが明らかとなった。さらに、JMP ソフトで順序ロジスティックの重回帰分析を用いて分析した結果、「語学の不安」と「仲間の欠如」が全体で最も大きい障壁であることが明らかになった。学年別の行動段階では、1 年生と 4 年生の間で統計的に有意な差があった。これらより、行動段階や潜在的・健在的な障壁に応じて、言語プログラムや仲間を見つけることができる交流会を開催するなどのアプローチの必要性を提言した。今回の ICN Congress での口頭発表や現地での学生大会、帰国後の学会参加報告会などでの活動を積極的に発信していくことで、日本の看護学生の活動の幅や意欲の幅を広げ、将来的に日本の看護学分野の発展が促進されると考える。本研究発表・学会参加は、SFC 学会研究助成金と笹川保健財団の学会参加補助金の支援を受け実現した。

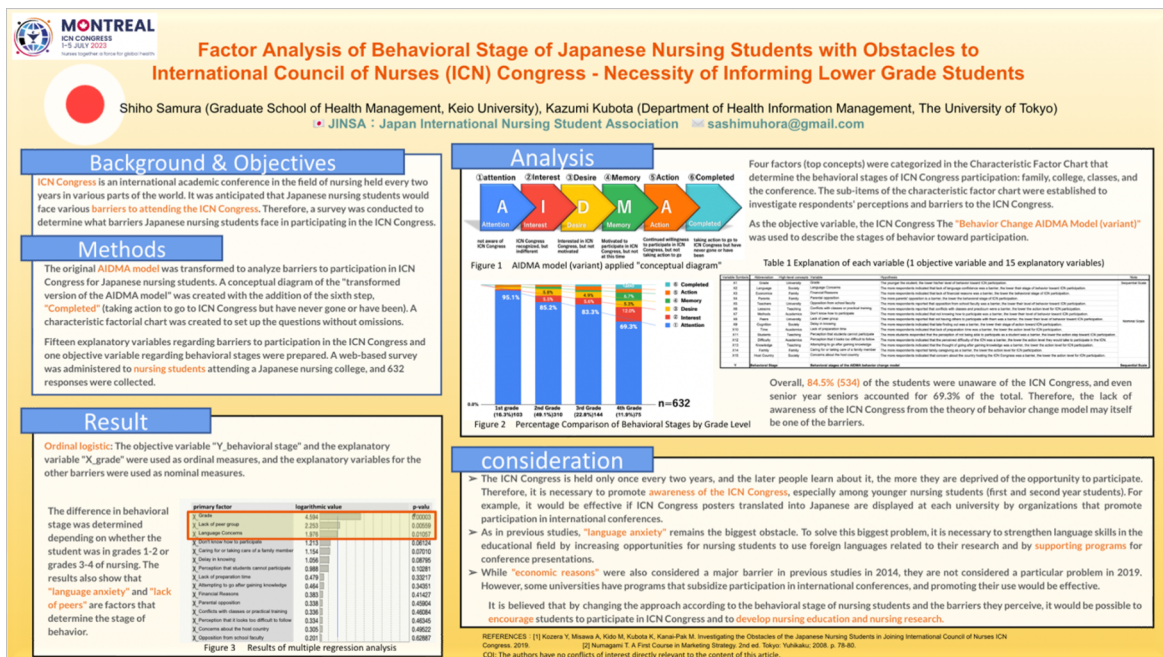


図 1 ポスター発表資料

## 【活動成果】

### ▶ 研究発表・学会参加

これまでコロナウイルスの感染拡大でオンライン形式での開催せざるを得なくなっていた ICN Congress が、対面形式（一部ハイブリッド）に復帰し初の開催となった今大会はオリンピック開会式並みの盛り上がりを見せていた。シンポジウムやセッションでの力強い専門的な発表に加え、参加者からの質問を通じたディスカッションも活発であった。自身の研究は E ポスターでの発表で採択され、本テーマに関して現地で研究者や看護教員とディスカッションを行った。日本の看護学生の学会参加やその際の障壁を共有し他国の様子も観察した。開催国カナダの大学生は参加のハードルが低く低学年での参加も見られたが、そのほかの国で看護師を目指す学生の参加は滅多に見られないことが分かった。

### ▶ ICN Nursing Student Assembly

看護学生向けのシンポジウムである Student Assembly は、学会前日の 6 月 30 日に対面形式で早朝から夜のネットワーク交流会まで開催された。内容としては、看護職のメンタルヘルスや、気候変動と地球の健康における看護の役割、マイノリティから見た看護の声、中低所得国における国内看護協会の重要性、看護の仕事が政治的に認められることの重要性など多くのテーマが取り上げられた。看護学生の運営グループをはじめとした多国の看護学生がグループワークを通して意見交換をし、非常に有意義な活動となった。参加者の多くは、看護学生というよりは看護師で修士・博士で研究する学生であった。

### ▶ 笹川保健財団主催ランチシンポジウム

7 月 2 日の昼食時には、笹川保健財団が主催するランチシンポジウムに参加した。本ランチシンポジウムは Sasakawa 看護フェロー海外留学奨学金プロジェクトに関係するイベントとして開催され、財団から 15 万円程度の参加補助を受け参加した。日本からは、10 数名の看護学分野に関わる学生が事前にチャットワークや現地での食事会を通して交流をした上で当日参加した。参加者には、Sasakawa 看護フェローとして活動している海外大学院在学中の学生や、看護職として経験を積んだ後に国内の大学院で研究活動をしている修士・博士の学生、さらには渡米して NP を目指す大学生もいた。本ランチシンポジウムに参加して、国際学会に参加する人の多くは、留学や海外移住をして看護学を学んだり看護職として活躍することを目指していると知り、自身の進路や日本社会への還元について考える機会となった。



図 2 ICN Nursing Student Assembly の様子



図 3 ICN Congress Opening Ceremony の様子

## 【今後の展望】

### ▶ 今後の研究や教育にどのように活かすか

今回の学会参加で日本の看護学生に興味を持ってもらうために、帰国直後の週末には、ICN 大会参加の報告会をハイブリッド型で計画した。報告会では、学会の様子を写真やエピソードを通して紹介すると共に、看護学生であっても学会参加だけではなく研究発表での挑戦も可能であることを強調する。今後は、日本人看護学生が ICN Congress の学会参加や研究発表を目指す学生集団である JINSA でメンバーを増やして活動を進めていく。